

●詩人の星野富弘さんが先週お亡くなりになりました。最も有名な詩の中に「たんぽぽ」という詩があります。

「たんぽぽ」

いつだったか きみたちが空をとんで行くのを見たよ

風に吹かれて ただ一つのものを持って

旅する姿が うれしくてならなかったよ

人間だって どうしても必要なものは ただ一つ

私も 余分なものを捨てれば

空がとべるような気がしたよ

「ただ一つのもの」は様々考えられますが、クリスチャンであった星野さんを思うと「真理(イエス・キリスト)はあなたたちを自由にする」(ヨハネ 8:32)の言葉が念頭にあったのではないのでしょうか。

●今日のローマの使徒への手紙の中で使徒パウロは「神が私たちの味方であり、御子を私達全てのために十字架の死に引き渡したのだから、誰も私達を罪に定められない」と語りました。パウロは元々はプライドが高く、律法主義で他者と比べて一定の価値観の優劣を計るような人物でした。しかし、パウロはある時、「どんなに頑張っても自分も罪人にすぎず、自分もいつかは力を失い死んでいく存在だ」と気づいたのです。

そして、人に本当の生きる喜びと意味を与えるものは、人の行いや社会的地位ではなく、キリストの十字架を通して与えられた神様の無条件の愛なんだと気づいたのです。そして、そのように目が開かれた時、様々な不安や恐れから解放されたのです。その神の愛を声高らかに歌ったのが「だれが、キリストの愛から私たちを引き離すことができますよう」という言葉です。神の救いの喜びと驚きがここに表されているのです。

●詩人でエッセイストの阿南慈子さんは 31 歳の時に多発性硬化症を発病し、身体の機能が次第に失われていきました。彼女は、それまで生きがいであった全てを失い、何もできなくなって自分の存在価値を問いました。その中で彼女は最終的に、どれだけこの社会で自分が小さい者とされても、神の愛だけは決して奪われないと気づいたのです。社会で最も小さくされた者にこそあのイエス様が共におられ、「こんな価値のない私を愛する方がおられる！」という驚きと感謝を味わい、動かない身体で詩を通して喜びと感謝を人々に伝えたのです。

●星野富弘さんや阿南慈子さんは、身動きのできない体で、力一杯人を生かし、真の自由を与えるイエス・キリストを証されました。いつかは力を失い、死を迎える私達ですが、私たちが決して奪われない神の愛にこそ希望を置いて歩む日々を送りたい。そう願います。